頑張っていたのに、何という諸行無常であろうか。しかし無念の涙は束の間で、もう帰れるんだと思うとうれしくさえなるのが私の心境であった。

その翌日、いつもの台湾人店に買物に行ったら、父兄で、いつも先生先生と快くしていた店の女主人は全く別人のようにつんとしていた。そこへ出てきた女生徒の「琉球ラー何日帰るか」の一言にがっかりした。

魚肉市場に行ったら、これまで上肉は日本人用、下肉は台湾人用としてあったが、今度は逆になっていた。町のところどころには蒋介石の肖像を貼りつけ、家ごとには支那の国旗を立てて、支那の国歌を楽隊に合わせて賑やかに流していた。またあちらこちらで日本人が殺されたり、傷を受けたりで、市は次第に物騒になっていった。それに米兵が上陸しているので、今に女性はおそわわていくなどの風聞もあって、終戦にはなったものの戦戦恐恐の毎日であった。

ともかく員林疎開者はマラリアの病苦、死人を出した精神苦、仕送りのない貧乏苦、無政府状態のための引き揚げ苦など、数々の辛酸をなめ尽したとはいうものの食糧は順調に配給され、大した空襲にもあわなかったことは不幸中の幸いであったといえる。お世話になった員林市民並びに当時の町役場の方々に対し深く感謝を捧げる。

そのうち八月二十一日付の手紙が、九月二十一日届いた。そのだいたいの内容は次のような文面であった。

「姉マラリアで死去。弘子と二人も悪性マラリアで九死に一生を得たようなもので、まだ元気は出ない。勝ち抜くんだと張り切っていた甲斐もなく、今後どうなるやら、信勇たちは何処で生き抜いているやら…。お前たちも何日帰れるものやら、早く帰ってもらえばよいがとそればかり祈っている」

こうなっては疎開先に止まる必要はないし、一日も早く引き揚げるべきだと思って、係員に早く引き揚げる方法を講じてくださるようにと、再三願い出たが、命令が出ない限り何とも言えないとのことであった。そこでますます焦り出し、遂に密かに逃げて帰ることを決心し、帰る準備に取りかかった。

密かに台湾を引き揚げる

まず船を探すことが先決問題だと、九月二十五日に、リツ子と二人ではるばる蘇澳南方に旅立った。汽車の旅を一度もしたことのない二人で、実に大胆不敵なことをしたのである。（中略）

汽車は満員で、私らの乗るすき間はなかった。仕方なく東校の先生方や大浜宣芳という憲兵が、一人一人抱えて窓からところかまわず投げ込んでくださった。当惑した台湾人らが怒り散らすのを平身低頭詫をして小さく縮こまっての遠い汽車の旅は辛かった。（中略）

五日後の十三日、八十トンほどの大神丸に乗り込み、午前九時ごろ南方港を出発した。ところが波風が荒くて船がひどく揺れ、ひやひやしていると子供らが大声を出して泣き騒ぐので、船長は与那国近くまで来ていたのに船を引き帰して元の南方港に戻った。そして二日延期して十五日再出発した。幸いにしてこんどは天気に恵まれ、十六日に員林発後九日目の午後四時頃無事石垣港に着いた。これが台湾引き揚げ者第一陣であった。因に神村家も親戚一家と共に私にちをたよって二日遅れて南方に来られたので、避難小屋を世話してあげ、共に南方生活をして同じ船で帰ったので、西世帯十五人の引き揚げ者であった。

再出発の時、私らと同時に出港した他の船は与那国沖で沈没したと聞いて自分たちの幸運を喜び合った。

見る影もなかったわか家の惨状

なつかしい郷里の土を踏んだものの痛恨の胸のどよみはおさまらない。スエ子の遺骨を強く抱きしめ、四人だけの子供をつれて泣き泣き護岸を歩いて行くと、わが家の近くに主人が杖にもたれてひょろひょろに立っている。

まるでされこうべに皮を貼りつけた容姿にびっくり仰天、それほどまでとは夢にも思わなかったのに、杖をついて歩く足どりもぐらついて今にも倒れそうである。

わが家に入ってみると、周囲は草ぼうぼう、家屋は建具も本箱、食器棚、薪棚、押入れ醤油瓶、味噌壷などみな空っぽになっている。ある物は井戸水と、半リットルの醤油、五十グラムほどの水になった塩、米一リットルくらい、これがわが家の全財産であった。他に小鍋には甘藷の葉の中にちらほら星のような数えられるくらいの米粒入りのおじやがあって、弘子と二人の夕飯に主人が炊いたとのこと、これでよくも生きてきたものだ、と息詰まるわが家の惨憺たる生活状態であった。

早速持参の米、味噌で作った銀飯、おみおつけをお膳に並べたら、主人は涙で箸を震わせながら「久しぶりの米飯におみおつけありがとう」と飯碗をおしいただいて食事しながら「夢のようだ」と話し合い、なつかしみ合う久しぶりの親子の夕食であった。

さて、私たちが引き揚げたことを伝え聞いた疎開者の家族が次々と訪ねて来られ、見る見るうちに庭一杯道にまで溢れ出るという多数の人になったので一人一人に応対することができなくなり、とうとう私は玄関先に立って演説するかのように大声で台湾の消息を詳しく伝えた。そして「ともかく早く迎えるよう町当局と引き揚げ方法を講じてください。私も町当局などに明日お願いに行きます」と伝えた。

翌日十月十七日、私は早速町役場、地方庁、警察署を訪ねて物騒な台湾の状態を話し、早く疎開者の引き揚げ方に責任を取ってくださるよう請願したが、どちらも無政府状態になっている何の反応もなかった。

そこで疎開者の家族は牛馬、家畜、田畑、家屋などを売り払って闇船を団体で雇ったり、誰かに旅費を預けて同伴を願ったりして引き揚げさせるようになり、十二月上旬から明けて一月までには八重山からの疎開者は大方引き揚げた。引き揚げの遅れた者は、金は無く着のみ着のままのぼろ衣をまとい、寒さに震え、食に飢えて栄養失調で死んだり、病死したりしたが、乞食同様に路頭にさまよいながらも九死に一生を得た者は、四月頃までかかって全員引き揚げとなった。当局は強引に疎開させて、後は無責任そのものであった。

戦争の悲しみ、苦しみ、恨み、痛み、憎しみの体験は脳裏に焼印されていて、胸のうずく恐ろしい生々しい思い出である。

現住所　　那覇市首里汀良町二ノ七ノ八
当　時　　五十三歳　　主婦

□□市民の戦時　戦後体験記録□（石垣市市史編集室　石垣市役所）所収□

□県民遺骨収集に参加して

糸満２４班　　野村朝賢（沖縄・那覇市）

今年もまた、一柱でも多くの収骨せんものと、遺族会の会員は揃って摩文仁の広場に集った。青壮年部も年老いた婦人部も、それぞれの思いを抱きながら時を待った。遺骨を入れる麻袋が配られ、何か胸が痛む思いをしながら、サラカチの刺に手足をとられ、枯草をかき分け、岩山を登っていった。特に、艦砲穴の跡をくまなくかき分け入って行った。先に歩いていた班から、「あったぞーつ」と大声が聞こえた。収骨がなるべく無いようにと祈っていたのに。やはり……。

午後４時すぎ、摩文仁（平和祈念公園）の広場には、７５の班の収骨した骨袋が次から次へと並べられた。それから出された遺骨は丁寧に拭かれて箱に納められた。泣きたい気持を抑えながらボランティアの婦人たちが白布で包んでいた。

１５３体が一堂に会したのだ。やっと４２年目に日の光を見て、嬉しいだろうか。「やあ君か」、「おれだよ」、「わたしよ」と話し合っているのだろうか。

それにしても、42年も土に埋もれて赤茶けた遺骨、青苔のこびりついた頭蓋骨、化石になり果てた骨くず、生前は互いに名前を呼びあった間柄なのに、男か女かもわからない。

42年も闇に静まり伏せて、われわれ収骨団を待っていたのかと思うと、胸塞がれる思いに目がかすんだ。

やっと、白布に包まれ、白い祭壇におさまった遺骨に線香が手向けられた。昇天して下さいと……。

こんなことで、沖縄の戦後が終わったとは決して言えまい。来年も再来年もやはり、どこかに埋もれた骨がみつかるだろう。われわれを呼んでいるー「ここにいるぞー」と。

今、生き残ったわれわれは、豊かに平和に暮していると思うと……。

【『県民遺骨収集』（沖縄県生活福祉部援護課）所収】

□　小骨を拾い尽くすまで

糸満26班　　中村文子（沖縄・那覇市）

２月２３日（日）、第２回県民遺骨収集の日は朝からよく晴れていました。１フィート運動の会は、那覇と中部の会員を主体に二台の車で南部（平和祈念公園）へ向いました。

県内はもちろん全国からの参加者は去年以上のように思われました。私どものグループは集合場所で指示を受けて、大渡方面へ向かいました。

身の丈近い雑草を鎌でなぎ払い、断崖の岩山を太い蔓草や潅木の技をたよりに降りていきます。まず、岩に腰をおろして片足を伸ばして足場を確かめるのですが、子どもを背に老人をかばい暗闇の中を逃げ惑った当時の女たちの苦労が偲ばれてなりませんでした。

降り切ったところは茅と雑木の密林でした。「毎年来ています」と、北海道からという足のご不自由な高齢の男性もここまで同行されました。

「ここよ、ここにいるのよ」とお骨が呼んでいるような気がして岩陰の木の根っこを片っ端から掘りました。三人くらい雨宿りができそうなくらい葉を広げたクワズ芋の密林にも入って懸命に掘りました。

反対側の岩山から「完全な姿のお骨が見つかりました」という声が伝わってきました。胸さわぎがして「どうぞ小骨でもいいから拾われますように」となお掘り続けましたが、結局、私どものグループは、食器のかけら、薬瓶、ボタンなどを掘り出しただけで、拾い集めた遺品を袋に大切にもって引き上げることにしました。

農道に出ると、人の話し声が聞こえてきました。近づいて見ると、農道に面した大きな亀甲墓の上にたくさんのお骨が集められていました。農道から４、５ｍと離れていない穴の中と、その周りの２、３人の人たちが呼応し合っているのです。墓の上のお骨は、大きな頭蓋骨に大きな歯がしっかりとついていて、側にあるすねの骨も太く見えました。革の巻脚もでているのを見ると、若い将校とその部下のかもしれないと思われました。穴の中ではまだ収骨が続いているようです。中に入っているのは、アメリカ人のボランティアの方だと聞きました。

それにしても、こんな農道のすぐ側に、しかも亀甲墓から２ｍも離れていないところにこんなたくさんのお骨が－と、改めて県民遺骨収集の継続が望まれてなりませんでした。

慰霊祭に臨んで、４２年目にしてやっと県民の手で温かく拾いあげられた１５４体のお骨に深く頭を下げ冥福を祈りました。

あれほどの好天気が崩れだし、しとしとと、やがて大降りになりました。今日、収骨されたお骨たちの感謝の涙か、それとも拾われなかったお骨たちの悲願の涙なんでしょうか。来年もいや、小骨のかけらまで拾い尽くす収骨作業が続けられますことを祈って、雨の中を那覇へむかいました。

【『県民遺骨収集』（沖縄県生活福祉部援護課）所収】

父と兄の戦死と遺骨収集

豊見城村字金良一一三番地　　大城　勲

私の兄、大城孝捷は昭和二十年六月二十日真壁村字江城で戦死。当時満十六歳の中学生であった。所属部隊は第二十四師団通信隊で階級は上等兵。兄はどんな仕事をしていたのだろうか。通信にかかわる仕事だから、危険な戦場にかけ出され、切断された電線をつないだりするのが主な任務だったのではないだろうか。

厚生省引揚援護局局長名で送られてきた「死亡告知書」の日付は、昭和三十三年五月十九日である。戦死して十三年も経過してから肉親には連絡しているのである。

父大城孝市は、昭和二十年十一月三十日、台湾の蘇澳庄でマラリヤによる戦病死。当時四十一歳の働きざかりであった。父は、南台湾海軍航空隊に所属、階級は海軍主計兵長となっている。父の死亡告知書が届いたのは、昭和三十三年の暮れである。父の遺骨は、戦友が持ち帰ってくれたので父の死は確定していたが、死亡告知書が届いた時、母は涙を新たにした。

兄孝捷の場合は事情が違っていた。戦争がすんで何年たっても死亡の確認ができなかったから、きっとどこかで生きているに違いないと信じ、祈っていた。唯一の情報といえば孝捷が負傷したまま南部方面を歩いているのを見たという人の話だけであった。確かな情報もなく、死に場所も分らず、遺骨のひとかけらさえもないわが子の死を信じろといっても無理であろう。当時四十歳だった母は、長男の生存を信じていた。そして十三年間も信じ祈り続けた。それを一枚の死亡告知書が無惨に打ち砕いたのだ。母は気違いのように嘆き悲しみ泣き苦しんだ。愛する夫だけでなく長男までも戦争に奪われてしまったのである。二人だけではない。母の両親も戦死している。肉親を四名も失なった母は、おそらく何度も死にたいと思ったことだろう。しかしそれは許されなかった。母には、五名の子どもが残されていたからである。十四歳の長女を頭に四歳までの三女二男をかかえていたのである。

その後の母の苦しみは計り知れないものがあり、とても筆舌につくせるものではない。母は、子どもたちに父親のいない寂しさを感じさせないほどに父親の役目までも果たした。物質的・経済的には恵まれなくても、心の豊かさの大切さを立派に教えてくれた。その母は、先年心臓病でこの世を去った。七十三歳であった。戦後三十余年、ようやく子どもたちも独立し、これからは母を大事にしようという時であった。母は父と同じ十一月に死んだ。

〈遺骨収集のこと〉

今年四月二十七日付の琉球新報紙上に「遺骨発掘打ち切る一糸満市大城森」という見出しの記事が出た。大型機械を投入しての収骨作業が不可能となり、ついに二百柱以上の御霊を一柱も発掘できないまま作業は打切り、再度の計画もないというのである。国の戦後処理の一つである遺骨収集がこのような結末を見たということに、表現のしようのない憤りを覚える。国のために命を捧げた人々が、骨を拾われて家族のもとへ帰ることもできず、永久に大城森の土と化してしまうのである。こんなにも空しい事実があろうか。

一九六一年十二月二十八日、南連、琉球政府援護課、沖縄遺族連合会、高野山大学生グループが協力して、南部の「健児の塔」一帯で収骨作業が行なわれた。その日、私も参加し、遺骨をさがしまわったが見つからなかった。戦後十七年もたっているから戦死者の遺骨が見つかるはずがないと思って帰ろうとした時だった。突然、うしろ髪を引かれ全身が総毛立つのを覚えた。ひきかえして洞穴をのぞこうとした足元で枯木の折れるにぶい音。よく見ると、それはまぎれもない遺骨であった。十七年間も風雨にさらされ、枯木となり土にかわる寸前まで我々が来るのを待っていたと思うと胸がジーンとなった。

そのあとすぐに、洞穴の入口で二柱見つかった。狭い洞穴をはいながら進むと、奥は広くなっていた。時間がたって洞穴の暗さに目がなれた時、私は白いものを発見した。それは五柱で、大小あり、一見して〃家族〃　だとわかった。よく見ると、白骨の前には小さなサカヅキが転がっている。追いつめられた家族が、どうせ死ぬのならみんな一諸に死のうと話し合い、毒を飲んだにちがいない。私は胸が熱くなり、涙をこらえることができなかった。私は白骨に合掌しながら誓った。戦争のときその家族に残された唯一の幸せは、「一緒に死ねる」ということだけだったのであろう。その家族の消息を知る手がかりになる品物は何一つ見つからなつた。骨は、真っ白だった。美しいまでに真っ白だった。

収骨作業に参加してから、私は物の考え方がすっかり変わったといってもいい。

人は死んでしまったら何もできない。ほんとうに空しいものだ。戦死者は、死ぬ時の苦しさ怒り悲しみ惨めさ希望等を訴えることはできない。それならば、生きている人が、戦死者の願いをかなえてあげなければならない。戦死者の願いとは何か。どんなことがあっても戦争をしてはいけないということだ。平和がどんなに尊いものであるかということだ。

私はその後、あらゆる機会をとらえて平和の尊さを訴えてきた。全国青年弁論大会やＮＨＫ青年の主張大会に沖縄代表として参加し沖縄問題を日本政府に訴えてきた。

【『沖縄県遺族の戦争体験記　想い遥か還らぬ人を』（沖縄県遺族連合会婦人部）所収】

慰霊塔建立

遺骨収集の草分け　旧真和志村住民

終戦後いち早く地域住民による遺骨収集作業を始めたのは、旧真和志村民である。

昭和二十一（一九四六）年一月二十一日、米軍の糸満地区隊長から金城和信氏（前沖縄県遺族連合会会長）が、真和志村長に任命された。沖縄戦のため各地へ疎開、避難していた旧真和志村民が、昭和二十一年一月二十三日米軍の指示により移動が始まった。集結地は、糸満市米須の米軍使用跡のテント幕舎であった。当時集結した村民は約四千三百余名（昭和十九年当時真和志村の人口約一万八千名）であった。

先ず集結完了と同時に、遺骨収集作業をした。未だ米軍の掃討作戦中で、集結地キャンプから外への出入りは厳禁されていた。米須の部落民も未だ部落に帰れなかった頃である

当時、道路脇、畑の中、畔道、溝の中、石垣の側、暗渠内、壊れた家屋の下、岩陰等、周辺いたる所に、遺骨が散乱していた。村長金城和信氏はその光景を見るに忍びず、早速米軍糸満地区隊長に対し、収骨作業の許可方を申し入れた。

なかなか許可がおりず、日参して心情を訴えつづけ二月二十三日やっと許可がおりた。早速二月二十五日に収集班を編成、ＣＰ引率のもとに五月末再移動するまで続けた。（ＣＰとは当時の民警察官のこと）

当時遺体はまだ戦没日浅く、完全に白骨化しおらず、頭髪はほとんどが元のまま残り、なかには皮膚の残った遺体もあった。

また、大人の遺体の側に、小さな遺体が二、三体重なり合った母子と思われる痛々しいものもあった。収集した遺体は担架で海岸沿いの広場に集められた。

金城村長は、納骨所の建立を急いだが、周囲には資材らしいものは石以外は見つからないので、資材の提供を米軍二世にお願いし、セメントや古寝台をもらって鉄筋代りに寝台の鉄骨を使い、周囲から石をかき集めて、納骨所らしいのが出来あがった。之を「魂魄の塔」と命名した。

昭和二十一年二月二十七日完成

同日十一時に慰霊祭が行なわれた。

慰霊祭のとき御霊に捧げられた歌

にぎたまとなりてしづもる　おくつきの

みことの上をわたる潮風（翁長助静氏作）

収集作業を進めているうちに、女子師範学校と第一高等女学校の生徒によって編成された従軍看護隊の壕も発見し、壕内の遺体を集め、壕の上部入口に納骨所を建て納骨し碑を建てた。之が現在の「ひめゆりの塔」である。

昭和二十一年四月五日建立

同年四月七日慰霊祭が行なわれた。

真和志村民から御霊に捧げられた歌

色香ゆかしき白百合の
霊の花と咲き出でて
世にかくわしく香るらむ
昭和二十一年　真和志村

また、その頃摩文仁丘西側にある健児隊（鉄血勤皇隊師範隊）の壕も発見、壕入口、壕内外に折り重なった遺体を収集、入口に納骨所を設け納骨した。その後壕の上部入口広場に師範学校同窓会によって「沖縄師範健児之塔」が建立された。

昭和二十一年四月九日納骨所建立、村民による慰霊祭が挙行された。

沖縄の霊域整備計画

前述のとおり沖縄の遺骨収集は、終戦直後からいち早く各市町村部落民によって自発的に収集が行なわれ、各部落毎に納骨所が急造され祭祀を行なってきた。

住民が沖縄戦の終結で、捕虜収容地区から部落に帰り家を建て、次第に生活の落ちつきを取戻すに従って、各家庭ではお墓の復興が始められるようになった。

沖縄では、「お墓」は、永久に自分達の落ちつく場所であり、家は現世の仮りの住まい、とする土着思想があり、その風習に促されるように、各家庭ではお墓の修復工事が急ピッチで進められた。戦前、農村の「墓」は、丘や山林、岩等の一角を堀り抜いて造られたのが多かったが、戦後はブロック造に変わり、外見も体裁もよくなり、環境も大へんよくなった。

しかし、戦後急造の、各部落納骨所は、個人のお墓に較べてかなり見劣りがした。

納骨所によっては、祭祀を行うのに、不便、不安なところがあったり、また管理面で行き届かない所もあって、霊域の整備もさることながら、中央納骨所へ移骨（集骨）して慰霊の趣旨を全うすべきだ、との声もでてきた。

たまたま機を同じくして、宮崎県で遺族の懇談会が開かれた際もこの問題が持ちあがった。「沖縄の人々は、自分のお墓はブロック造りで大へん立派に建てるが、戦没者を祀る納骨所は、お粗末である。何とかできないものか」と。

当時の新聞にも「遺骨と遺族の誤解」というみだしで報道された。

そのような問題提起を受けて、当時の那覇日本政府南方連絡事務所、琉球政府（援護課）、沖縄遺族連合会の間で、今後の遺骨収集、塔納骨所の管理、霊域の整備等についてをテーマに、昭和三八年三月一日、懇談会を持ち左記事項が協議された。

記

一、現時点での収骨状況（昭和三十八年三月現在）

対象件数の約九七%が処理されている。

未収骨は、
イ、壕の落盤、埋没等で発掘に機械力と技術を要する個所
ロ、戦時中の仮埋葬したもので情報が不明のもの
ハ、山林原野内の奥深い処で戦後一般の人々の末踏の地点
と予想される。
右の“イ”については日本政府に強く発掘方を要請する。
“ロ”“ハ”については各地元市町村と、情報の提供等密接な連携を以て、早急に当たる。

二、納骨所の管理運営について
イ、納骨所は現在二二四ヵ所で管理面も不十分であり、将来は年次計画で整理統合、整備の必要がある。
ロ、各市町村及部落の納骨所は、中央納骨所へ移骨整理統合する。
之の実施については、夫々の市町村、部落民の意志を尊重して行う。

三、右の協議に基き、那覇日本政府南方事務所は全面的に支援、日本政府の遺骨処理委託費予算面も増額折衝することを了承した。
このような話し合いに基き、那覇日本政府南方連絡事務所（以下南連）と琉球政府（援護課）では具体的な実施計画を立て、推進することになった。
この計画によって部落に建てられた納骨所のほとんどが、遺骨を焼骨のうえ中央納骨所へ転骨された。転骨した納骨所八六ヵ所

国立沖縄戦没者墓苑の建立

昭和二十八年三月、日本政府は沖縄にも「戦傷病者戦没者遺族等援護法」を適用することを決め、その後沖縄に於ける遺骨収集処理についても、琉球政府へ委託して行なわせるようになった。

昭和三十二年に、収骨した遺骨を祀るため、琉球政府は日本政府の委託を受けて、戦没者中央納骨所を那覇市識名の霊苑内の一角に、建設費一四八万八千円で建設した。

当時の納骨数は約一万五千余柱、しかし、その後各地域で収集される遺骨を収容するには、狭隘となった。以来、三回に亘り拡張工事が施されたが、昭和五十四年二月厚生省は、新たに沖縄戦没者墓苑を摩文仁丘に建設し、中央納骨所から遺骨を移転して納骨した。

現在、同苑の納骨数は約十七万余柱。敷地面接八五二八平方㍍、建築面積一七六平方㍍（参拝所一一〇平方㍍納骨堂六六平方㍍）。

【「還らぬ人とともに」　（発行（財）沖縄県遺族連合会）所収】

いかだを奪いあう大人たち

当時　国頭村安波国民学校四年生（九歳）
現在　大宜味村喜如嘉小学校教諭
平　良　啓　子　（旧姓宮城）

当時私は、沖縄県北部の国頭村安波国民学校四年生で、九歳であった。

安波からは、一般合わせて約七世帯で三十七人が対馬丸に乗った。

あれから三十三年、今日もまた、魔の海でのできごとが脳裏をよぎって行く。暗夜の海での一千六百余の人々は、先生の名を呼び、兵隊さんに助け求めて叫び続けた。だが、力の限りのもがきもむなしく、幼い命は静かに海底へと沈んでしまった。

八月二十二日の天気は晴れて、暑さの中にも、時折りやわらかな風が吹いていた。昼食後、祖母と従妹の時子（九歳）と宮城栄昌先生（横浜国立大学名誉教授）のお母様と四人で、甲板へ上がって行った。日本の飛行機が翼を傾け、船上に影を落して飛び去った。一緒に走っていた船の姿も見えなくなっていた。

甲板のわきばらでは、炊事のコックさんが食べ残しの麦めしを海中にほうり込んでいた。二人の老母は、「もったいないね。あれで味噌を作りたいね。」と、ささやいていた。

時子と私は、祖母たちが座っているまわりをかけ出して遊んでいた。近くで歌をうたっている学童達も見えた。しばらくして、兄が、私達を呼びに来た。船底へ降りてみると、救命胴衣を配給していた。私達家族六人も受け取った。六年生の兄は、「ぼくのは、一番新品だ。」と、自慢していた。それを身にまとい全員甲板に上ったのは、午後六時頃であった。

やわらかい日差しを背に受けて、誰かの説明を聞いた。人々が、ざわめき過ぎて、その時の話はほとんど覚えていない。

「船では、仕事もないから、防空演習をするのかね。」と時子と私は話し合っていた。私達二人は、不安というより、少し、はしゃぎ過ぎていた。家族が、一かたまりになって甲板ですごすことになった。

そのときである。姉が、ふいに、

「壮吉、啓子、時子、こっちへおいで。」と誘われて行った所は船べりであった。

「もし、この船が、敵の潜水艦にやられたら、船からとび込んで、向こう百メートル先まで、泳げるか。」とっさの質問にとまどったが兄は、

「たった百メートルだろう。できるさ。」と答えた。泳ぎの上手な兄はよほど自信があったのか、それとも負け惜しみで言ったのか分らない。私と時子は、浪のうねりと、速さを見て、「泳げない。怖い。魚がテンプス（おへそ）を食うかも知れないから怖い。」と答えた。

今考えると姉は、女学校生でもあったので危機感にせまられて、質問をしたと思う。

それから、私は、不穏な空気だと感じ始めた。大人達が、不安そうにこそこそ話し合っている姿が、見受けられたからである。それにみんな静かすぎるとも思っていた。家族がひとかたまりになって座り込んだのは、薄寒くなった午後八時頃である。私と時子は、祖母の両腕によりかかって、いつしか眠ってしまった。

ドシンとものすごい音に目が覚めて気が付いた時には、船体はほとんど沈みかけていた。

救命胴衣を身にまとい、甲板にひとかたまりにいたはずの家族五人の姿が見つからない。私は、恐ろしさと、心細さにわめきたい心をぐっとこらえて、暗闇の中を肉親を探し求めた。船体は、無残に破壊され、人々は浪の渦と大小さまざまな物体に挟み打ちされながら悲鳴をあげ、助けを求めていた。

一人の老母が、浪の流れに身をまかせて、うめきながら姿を消して行った。あたりは、人か物か見当がつかない。

「子供の頭が、われてしまった。」と泣き叫ぶ母親の声も聞えた。それは、子供の頭ではなく、南瓜が水中から、ぷくぷく浮き上がってきたものらしかった。

船体の片方の小高い所に、十人位の水兵さんらしい人たちが、呆然と不動の姿勢で、「君が代」を口ずさんでいた。

あたりが、急に静かになったので、はてなと思ってみまわしたら、なんと死体が私のまわりにごろごろ浮いていた

人々のうめき声や、泣きわめく声は、遠く細く聞えていた。私はあっちへ行こうか、こっちへ逃げようかと、おどおどしていると、従妹の時子に出合った。私に出合ったとたん時子は声をはり上げて泣きわめいた。勿論私も泣きたかった。

二人は、沈みかけた船体の上で、アップ、アップもがいていると、どこからともなく流れてきた醤油樽に取りすがることができた。

そこを早く抜け出ないと、色々な雑物に挟み打ちされてしまう。時々大浪がドッとかぶさってくる。同じ年齢でも、気の弱かった時子は、ますます激しく泣き出した。

「泣いたら、先が見えないよ。泣かないで！」と励ましながら、どこから抜け出そうかとあたりを見回していると、姉が、

「啓子！　時子！　早くとび込め！」

「あぶないぞ！　早く！早く」その声は、船体の外側からであった。

「姉ちゃん待ってよオ！」と声をはり上げて喜んだのもつかの間、姉は大浪に乗って尚も速くの方へ行ってしまった。

二人は、悲しい思いにうちひしがれたまま醤油樽だけは、決して手放すまいと、しっかりと取りすがっていた。煙突が、ぐらぐらと倒れて行った。子供をおぶったまま、海へ落ちて行く婦人の姿も見えた。

その時である。ふいに大浪が覆いかぶさってきて、時子が、醤油樽から手を放してしまった。おびえ、おののき泣き疲れた時子は、きっと気力を失っていたのかも知れない。白い絹のワンピースを着ていたので、白く見えるものは時子ではないかと、しばらくそこら中を見回したり、手でふれても見たが、とうとう時子の姿は見つからなかった。それが時子との永遠の別れになった。

二人は、小さい時から、何をするにも何時も一緒だった。目玉が大きく、可愛らしく、しかも心のやさしい子であった。

ひとりぼっちになった私は、これからどうすればよいかも分らず、おろおろしながら、自分の体にぶつかってくる物体を取り払うのに精一ぱいだった。

人々のうめき声は、まだ小さく、細く聞こえていた。力がつきてもの言わぬ屍がだんだん群がってきた。雑物の下敷きにされてわめいている人もいた。

五十メートル先で人々のざわめきが聞こえる。私もあそこへ行こうと向きを変えると、